



2025年度 第2回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類 長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2026年4月～9月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域は、4月および6月に「平均的な位置(屋久島南付近)」もしくは「離岸傾向」となるが、その他は「平均的な位置」もしくは「接岸傾向」で経過する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、「**年並み**」～「**かなり高め**」で経過する。

※引用符「 」で囲んで表した**年並み**の水温の高低の程度は以下のとおり。

「**年並み**」 : 約2年に1回程度の発生頻度

「**やや**」 : 約3年に1回程度の発生頻度

「**かなり**」 : 約7年に1回程度の発生頻度

漁況(来遊水準)

- (1) マアジ : 東シナ海は沖合域は前年・**年並み**、沿岸域は前年・**年並み**。
日本海は前年を上回り、**年並み**。
- (2) マサバ : 東シナ海は沖合域は前年**並み**で、**年**を上回り、沿岸域は前年**並み**で、**年**を上回る。
日本海は前年**並み**で、**年**を上回る。
- (3) ゴマサバ : 東シナ海は沖合域は前年・**年並み**、沿岸域は前年・**年並み**。
- (4) マイワシ : 東シナ海は前年**並み**で、**年**を上回る。日本海は前年・**年並み**。
- (5) ウルメイワシ : 東シナ海は前年・**年並み**。
- (6) カタクチイワシ : 東シナ海は前年・**年**を下回る。

※「前年」は2025年4月～9月。「年並み」は過去5年の平均値。

※東シナ海の予報対象は上記の全6種、日本海の予報対象はマアジ、マサバ、マイワシ

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構

担当 : 漁況 : 浮魚資源部(長崎) 黒田、高橋

海況 : 海洋環境部(長崎) 奥西、種子田、和川

電話 : 095-860-1600(長崎)、ファックス : 095-850-7677(長崎)

当資料のホームページ掲載先URL

<https://www.fra.go.jp/home/kenkyushokai/press/>

予報対象海域

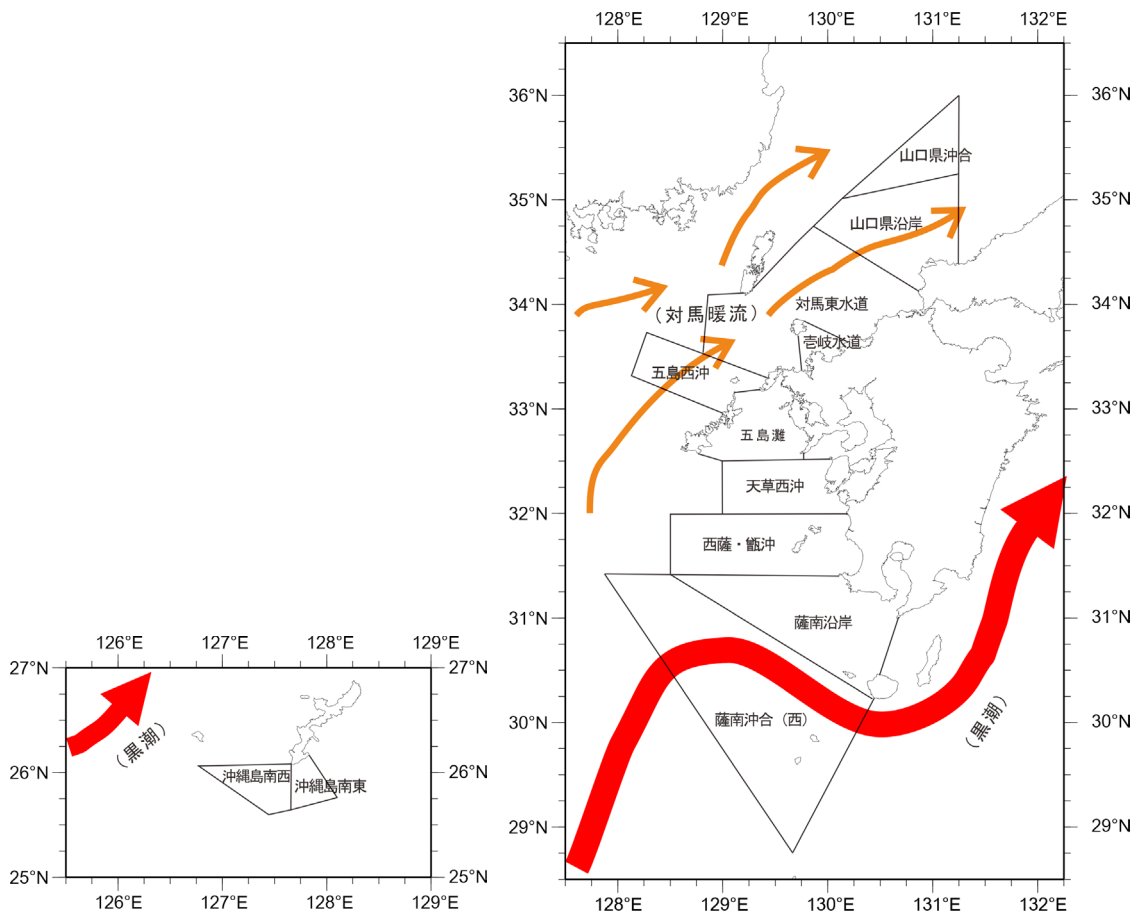


図1. 海況 (沿岸)

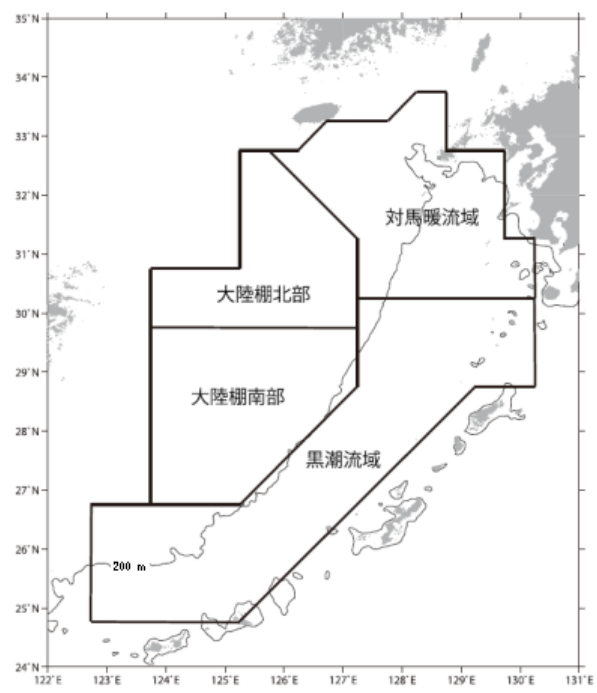


図2. 海況 (沖合)

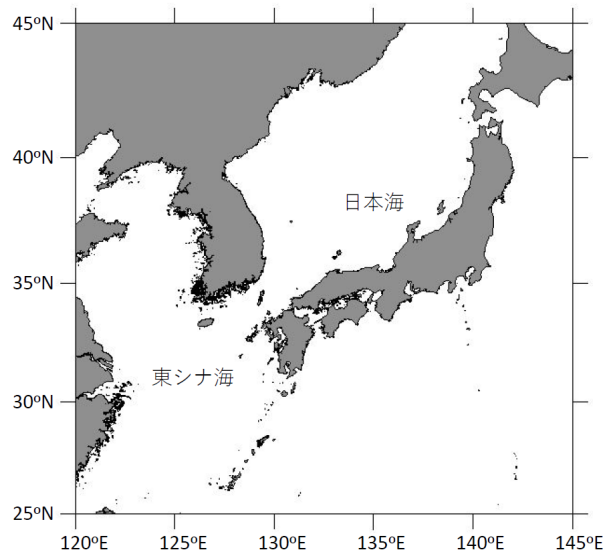


図3. 漁況

東シナ海：鹿児島県から山口県までの沿岸とその沖合を含む海域

日本海：島根県から青森県までの沿岸とその沖合を含む海域（陸奥湾を含む）

西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2026年4月～9月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、短期的な南北移動を繰り返し、4月および6月に「平均的な位置（屋久島南付近）」もしくは「離岸傾向」となるが、その他は「平均的な位置」もしくは「接岸傾向」で経過する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道、天草西沖、大陸棚上、黒潮流域は「やや高め～かなり高め」、五島西沖、五島灘、西薩・甕沖、薩南沿岸、薩南沖合、沖縄島周辺海域は「平年並み～やや高め」で経過する。

2. 経過（2025年10月～2026年3月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：10月～12月「はなはだ高め」、1・2月「かなり高め」。

南部：10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、12月「はなはだ高め」、1月「やや高め」、2月「かなり高め」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、10月～12月は「平均的な位置（屋久島南付近）」、1月は「離岸傾向」、2月は「平均的な位置」で経過。

(2) 海面水温

10月「はなはだ高め」、12・1月「かなり高め」、1月「平年並み」、2月「やや高め」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：10月「はなはだ高め」、11・12月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「はなはだ高め」、11・12・2月「平年並み」。

対馬東水道：10月「はなはだ高め」、11・12月「かなり高め」、1・2月「やや高め」、3月「かなり高め」。

壱岐水道：10月「はなはだ高め」、11月「かなり高め」、12・1月「やや高め」、2・3月「かなり高め」。

五島灘：10月「はなはだ高め」、2月「やや高め」、3月「かなり高め」。

天草西沖：10月「はなはだ高め」、3月「かなり高め」。

西薩・甕沖：3月「かなり高め」。

薩南沿岸：3月「かなり高め」。

薩南沖合：3月「やや高め」。

沖縄島南東：11月「かなり高め」、3月「平年並み」。

沖縄島南西：11月「はなはだ高め」、3月「やや高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：10月～12月「平年並み」。

山口県沿岸：10月「平年並み」、11・12月「やや高め」、2月「平年並み」。

対馬東水道：10月～2月「平年並み」、3月「やや低め」。

壱岐水道：10月～2月「平年並み」、3月「かなり低め」。

五島灘：10・2・3月「平年並み」。

天草西沖：10・3月「平年並み」。

西薩・甕沖：3月「やや低め」。

薩南沿岸 : 3月「やや低め」。
薩南沖合 : 3月「やや低め」。
沖縄島南東 : 11月「やや低め」、3月「平年並み」。
沖縄島南西 : 11・3月「やや低め」。

3. 現況 (2026年3月中旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「かなり高め」、南部「かなり高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「離岸」。海面水温は「かなり高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「はなはだ高め」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の発生頻度
「かなり」 : 約7年に1回程度の発生頻度
「やや」 : 約3年に1回程度の発生頻度
「平年並み」 : 約2年に1回程度の発生頻度

マアジ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：15～24cmの1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆銘柄）と24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年を上回り、平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部が漁場となる。

(3) 魚体：15～25cmの1・2歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が主に、5～15cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）と25cm以上の3歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2025年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2025年11月～2026年1月）および見通し（2026年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準だったが、1980年代から1990年代前半に増加し、1993年～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999年～2002年には30万～40万トンだったが、2003年、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2006年以降は30万～40万トンで推移し、2024年の資源量は37万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジの漁獲量は、1973年～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993年～1998年には20万トンを超えたが、1999年～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであった。2005年～2017年は11万～14万トンであったが、2018年以降は10万トンを下回り、2024年は7万トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2025年11月～2026年1月の大中型まき網漁業のマアジの主な漁場は、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業の漁獲量は1千トンで前年（2024年11月～2025年1月、1千トン）並みで、平年（3千トン）を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を下回った（表1）。漁獲の主体は17～25cmの1歳魚（2024年級群）と17cm以下の0歳魚（2025年級群）であった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年を下回り、平年並みであった（表2）。漁獲の主体は17～22cmの1歳魚（2024年級群）、22cm以上の2歳魚（2023年級群）以上で、17cm以下の0歳魚（2025年級群）も漁獲された。

3. 今後の見通し

資源評価や直近の漁況より、2024年級群の豊度は2023年級群を上回るとみられる。調査船調査の結果やこれまでの漁況から、2025年級群の豊度は2024年級群並みとみられる。2026年級群の豊度の評価は難しいが、資源評価における親魚量は安定していることから、2025年級群並みと見積もるのが妥当であろう。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期には1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄）と2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。この時期はマアジの盛漁期にあたり、沖合域、沿岸域ともに近年漁獲量は安定している。漁獲の主体となる1歳魚の豊度は前年並みとみられることから、沖合域、沿岸域ともに来遊量は前年・平年並みと考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期には1・2歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄）が漁獲される。この時期はマアジの盛漁期にあたるが、近年漁獲量は減少傾向にある。漁獲の主体となる1歳魚の豊度は前年並みであるが、2歳魚の豊度は前年を上回ることから、来遊量は低調であった前年を上回り、平年並みと考えられる。

マサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。
魚の大きさは尾叉長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島西、対馬沖、沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33～35cmの2歳魚（小銘柄）が、漁期後半は1・2歳魚に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、日本海西部～中部が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は26～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）と33cm以上の2歳魚以上（小・中銘柄）が、漁期後半は1歳魚以上に加えて、25cm以下の0歳魚（豆銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2025年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2025年11月～2026年1月）および見通し（2026年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、60万トン前後に留まった。近年は、2013年に46万トンまで減少したが、2014年以降、高い加入量に支えられて資源量は増加し、2024年は91万トンと推定された。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降は概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2019年以降8万～10万トンであったが、2024年は13.5万トンに増加した。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2025年11月～2026年1月の大中型まき網漁業のマサバの主な漁場は対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万2千トンで前年（2万7千トン）を下回り、平年（1万9千トン）並みであった。九州主要港の相場情報に基づくマサバの漁獲量は前年並みで、平年を上回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年・平年を下回った（表1）。漁獲の主体は22～27cmの0歳魚（2025年級群）と28cm以上の1歳魚（2024年級群）以上であった。

ただし、大中型まき網漁業や長崎県の沿岸漁業では、陸上の処理能力やTACによる制約などのためさば類の漁獲量を規制した期間があった。

(2) 日本海

島根県～青森県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を上回った（表2）。漁獲の主体は21～27cmの0歳魚（2025年級群）と28cm以上の1歳魚（2024年級群）以上であった。ただし、主要港の一部では、陸上の処理能力などのためさば類の漁獲量を規制した期間があった。

3. 今後の見通し

今年度の資源評価結果や2025年秋以降の小銘柄の漁況から判断すると、2024年級群の豊度は2023年級群を上回るとみられる。2025年秋以降の豆銘柄の漁況から判断すると、2025年級群の豊度は2024年級群並みか下回るとみられる。2026年級群の豊度の評価は難しいが、資源評価における将来予測結果から判断すると、2025年級群並みと考えられる。0～2歳魚が漁獲の主体であることから、系群全体の豊度は前年並みと考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないものの、安定した漁獲がある。沖合域、沿岸域とも、1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、2歳魚（小銘柄）も漁獲される。後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる1歳魚の年級豊度は前年並みか下回るとみられるが、直近の漁況から判断して、沖合域、沿岸域とも来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期はマサバの盛漁期にあたらないが、近年は漁獲量が増加している。1歳魚以上（豆～中銘柄）が漁獲の主体で、後半には0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲の主体となる1～2歳魚の豊度は前年並みとみられる。2025年秋以降の好漁から判断して、来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

ゴマサバ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）、3歳魚（2023年級群）。魚の大きさは尾叉長で表示。

(1) 来遊量：沖合域、沿岸域とも前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、東シナ海中・南部、五島灘・薩南、鹿児島県の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：沖合域では15～28cmの0歳魚（豆銘柄）および28～32cmの1歳魚（豆・小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～37cmの1歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2025年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2025年11月～2026年1月）および見通し（2026年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降、10万～20万トン程度で推移し比較的安定していた。近年は、2015年以降増加傾向を示し、2018年には21万トンに達したが、2019年に急減した。2021年以降増加し、2022年は19万トンとなったが、再び減少に転じ、2024年は11万トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代から概ね5万トン前後で推移したが、2013年以降は3万トン前後の低い水準で推移した。2018年に増加したものの、2020年は1973年以降で過去最低の2万トンであった。その後増加傾向にあり、2024年は3万3千トンであった。

2. 漁況の経過

2025年11月～2026年1月の大中型まき網漁業のゴマサバの主な漁場は、対馬沖であった。九州主要港へ水揚げされた大中型まき網漁業のさば類の漁獲量は2万2千トンで前年（2万7千トン）を下回り、平年（1万9千トン）並みであったが、九州主要港の相場情報に基づくゴマサバの漁獲量は前年を上回り、平年を下回った。

鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を上回った（表1）。20～40cmの0歳魚（2025年級群）以上が漁獲された。

ただし、大中型まき網漁業や長崎県の沿岸漁業では、陸上の処理能力やTACによる制約などのためさば類の漁獲量を規制した期間があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果やこれまでの漁況から判断すると、2024年級群の豊度は2023年級群を下回り、2025年級群の豊度は2024年級群並みとみられる。2026年級群の評価は難しいが、資源評価における将来予測結果から判断すると、2025年級群並みと考えられる。

例年、4月～9月期は沖合域では1歳魚（豆・小銘柄）が漁獲の主体で、0歳魚（豆銘柄の一部）も漁獲される。漁獲量の大半を占める1歳魚の年級豊度は前年並みであることから、沖合域の来遊量は前年・平年並みと考えられる。沿岸域では1歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。沿岸域の来遊量は、直近の漁況を考慮すると、前年・平年並みと考えられる。

マイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年4月～9月）

対象海域：東シナ海・日本海

対象漁業：まき網、棒受網、定置網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）、3歳魚（2023年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

1. 東シナ海

(1) 来遊量：前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15～22cmの1～3歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半は15cm以下の0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

2. 日本海

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：漁期前半に日本海西部～中部、後半に日本海西部の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は16～22cmの1～3歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半は15cm以下の0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2025年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2025年11月～2026年1月）および見通し（2026年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、1980年代にかけて高い水準にあった。しかし、1990年代に急激に減少し、2001年～2003年には過去最低水準となった。その後、2004年～2012年にかけて増加に転じ、2013年以降横ばい傾向にあったが、2019年から再び増加に転じ、2024年の資源量は175万トンと推定された。

東シナ海・日本海における我が国のマイワシの漁獲量は、1983年～1991年までは100万トン以上と多かった。その後、急激に減少し、2001年～2003年の漁獲量は1千トン程度で推移した。2004年から漁獲量は増加傾向となり、2010年代には横ばい傾向にあったが、2019年以後急激に増加して、2024年は14万4千トンであった。

2. 漁況の経過

(1) 東シナ海

2025年11月～2026年1月の鹿児島県～山口県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年並みで、平年を上回った（表1）。海域別に見ると、長崎県および鹿児島県において前年・平年を上回った。漁獲の主体は、11～15cmの0歳魚と16～21cmの1歳魚以上であった。

(2) 日本海

2025年11月～2026年1月の島根県～青森県地先におけるマイワシの漁獲量は、前年を下回り、平年を上回った（表2）。漁獲の主体は11～15cmの0歳魚と16～21cmの1歳魚以上であった。ただし、主要港の一部では、陸上の処理能力による制約などによりマイワシの漁獲量を規制した期間があった。

3. 今後の見通し

資源評価結果や直近の漁況より、2023年級群の豊度は2022年級群よりも大きく、2024年級群の豊度は2023年級群よりも大きいとみられる。また、当歳魚を対象としたトロール調査と産卵調査より、2025年級群の豊度は大きかった2024年級群並みか若干下回るとみられる。2026年級群の豊度の評価は難しいが、親魚となる1歳魚以上の来遊状況を示す直近の漁況から判断すると、2025年級群並みと考えられる。

(1) 東シナ海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は、資源豊度の増加に伴い漁期が長期化する傾向にあり、漁期前半における1歳魚以上の漁獲量と漁期後半における0歳魚の漁獲量に強く影響される。年級豊度と直近の漁況を考慮すると、漁期前半における来遊群を構成する1～3歳魚（2023～2025年級群）の豊度は前年同期の1～3歳魚（2022～2024年級群）の豊度並みとみられる。漁期後半における来遊群を構成する0歳魚（2026年級群）の豊度は前年並みと考えられることから、東シナ海の内来遊量は前年並みで、平年を上回ると考えられる。

(2) 日本海

例年、4月～9月期の前半には1歳魚以上（中羽・大羽銘柄）が主体に漁獲され、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲される。近年の漁況は、漁期前半における1歳魚以上の漁獲量と漁期後半における0歳魚の漁獲量に強く影響される。年級豊度と直近の漁況を考慮すると、漁期前半における来遊群を構成する1～3歳魚（2023～2025年級群）の豊度は前年同期の1～3歳魚（2022～2024年級群）の豊度並みとみられる。漁期後半における来遊群を構成する0歳魚（2026年級群）の豊度は前年並みと考えられることから、日本海における来遊量は前年・平年並みと考えられる。

ウルメイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）、2歳魚（2024年級群）。
魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年並み。

(2) 漁期・漁場：期間を通して、長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は15cm以上の1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は5～15cmの0歳魚（小羽・中羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2025年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2025年11月～2026年1月）および見通し（2026年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海における資源量は1976年から1984年にかけて減少したのち、1990年代初めまで増加に転じた。1994年までは資源量が10万トンを超える年もあったが、その後再び減少し、2003年に2万5千トンとなった。2003年以降は変動しながら増加し、2015年には14万3千トンに達したが、その後減少して、2024年の資源量は9万5千トンとなった。

東シナ海・日本海での我が国の漁獲量は、1976年から1998年まで毎年2万トンを超える漁獲があった。特に1980年代後半から1990年代前半までは4万トンを上回る年が多くみられた。しかし、1990年代後半から2000年にかけて1万トンまで減少した。2001年以降は増加傾向にあり、2013年と2016年には5万トンを超える漁獲量となった。2017年以降の漁獲量は3万1千～3万9千トンの間で変動したが、2020年は1万9千トンと大きく減少した。2021年以降は漁獲量が再び増加し、3万4千～6万1千トンの間で変動しており、2024年は4万3千トンであった。

2. 漁況の経過

2025年11月～2026年1月の鹿児島県～山口県地先における沿岸漁業の漁獲量は、前年並みで、平年を上回った（表1）。漁獲の主体は15～20cmの0歳魚（2025年級群）で、20cm以上の1・2歳魚（2024・2023年級群）も漁獲された。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期前半には1・2歳魚（中羽・大羽銘柄）が、後半には0歳魚（小羽・中羽銘柄）が漁獲の主体となる。これまでの漁況の経過、東シナ海における産卵量および中層トロールの調査結果から、2025年級群の豊度は2024年級群並みとみられる。2026年級群の豊度を予測するのは困難であるが、年級豊度と直近の漁況から2025年級群並みと考えられる。したがって、全体の来遊量は前年・平年並みと考えられる。

カタクチイワシ対馬暖流系群の漁況予報

今後の見通し（2026年4月～9月）

対象海域：東シナ海

対象漁業：まき網、棒受網、その他

対象魚群：0歳魚（2026年級群（2026年生まれ））、1歳魚（2025年級群）。魚の大きさは被鱗体長で表示。

(1) 来遊量：前年・平年を下回る。

(2) 漁期・漁場：4月～6月が主体となる。長崎県南部以南の沿岸域が主な漁場となる。

(3) 魚体：漁期前半は5cm以上の0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が、漁期後半は4～8cmの0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主に漁獲される。

注：「前年」は2025年4月～9月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。

漁況の経過（2025年11月～2026年1月）および見通し（2026年4月～9月）についての説明

1. 資源状態

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1977年以降、2020年まで増減を繰り返しながら11.2万～42.6万トンで推移した。2020年以降は減少傾向にあったが、2024年に急減し、過去最低となる3.3万トンと推定された。

東シナ海・日本海における我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1997年を除いて1996年～2000年には10万トンを超えていたが、2004年には6万1千トンまで減少した。その後2005年～2008年には増加したが、2009年～2013年には減少し、2014年・2015年に増加して6万1千トンであった。2016年以降は減少傾向にあり、2024年には1万1千トンとなった。

2. 漁況の経過

2025年11月～2026年1月の鹿児島県～山口県地先における漁獲量は前年・平年を大きく下回り、記録的に低い水準となった（表1）。不漁の影響もあり体長に関する情報はほとんど得られていない。

3. 今後の見通し

例年、4月～9月期の前半は0・1歳魚（小羽・中羽・大羽銘柄）が、後半は0歳魚（カエリ・小羽銘柄）が主体に漁獲される。2025年4月～9月の漁況等から、2025年の春季発生群の豊度は2024年の春季発生群を下回るとみられる。また2025年10月～2026年1月の漁況等から、2025年の秋季発生群の豊度は2024年の秋季発生群を下回るとみられる。2026年の春季発生群の豊度を予測するのは困難であるが、2025年の春季発生群並みであると仮定すると、全体の来遊量は不漁であった前年をさらに下回り、平年も下回ると考えられる。

表1. 東シナ海における沿岸域の漁況経過（2025年11月～2026年1月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
鹿児島	漁獲量は289トンで、前年・平年を下回った（前年比25%、平年比30%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は147トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比39%、平年比93%）。	枕崎港の中型まき網による漁獲量は2,232トンで、前年・平年を上回った（前年比124%、平年比197%）。
熊本 牛深港	漁獲量は109トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比127%、平年比88%）。	漁獲量は127トンで、前年・平年を下回った（前年比47%、平年比22%）。	
長崎	地域により差があるが、中型まき網の漁獲量は2,839トンで、前年・年並みであった（前年比105%、平年比91%）。	中型まき網の漁獲量は4,337トンで、前年・平年並みであった（前年比80%、平年比81%）。	
佐賀	漁獲量は147トンで、前年・平年を上回った（前年比328%、平年比165%）。	漁獲量は45トンで、前年・平年を上回った（前年比761%、平年比187%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は10トンで、前年・平年を下回った（前年比9%、平年比12%）。漁獲のうち、マメ銘柄が66%、大銘柄が22%であった。小型定置網の漁獲量は6トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比351%、平年比111%）。	代表港中型まき網漁獲量は4トンで、前年・平年を下回った（前年比6%、平年比12%）。漁獲のうち、マメ銘柄が主体であった。	代表港中型まき網漁獲量は5トンで、前年・平年を下回った（前年比13%、平年比7%）。
山口	中型まき網漁業の漁獲量は276トンで、前年・平年を上回った（前年比183%、平年比192%）。	中型まき網漁業の漁獲量は36トンで、前年・平年を下回った（前年比31%、平年比30%）。	

注：「前年」は2024年11月～2025年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
鹿児島	主要4港のまき網による漁獲量は764トンで、前年・平年を上回った（前年比149%、平年比312%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は36トンで、前年・平年を上回った（前年比213%、平年比162%）。	主要4港のまき網による漁獲量は1,061トンで、前年・平年を上回った（前年比243%、平年比214%）。北薩海域における棒受網による漁獲量は104トンで、前年・平年を上回った（前年比285%、平年比216%）。	主要4港のまき網による漁獲量は11トンで、前年・平年を下回った（前年比5%、平年比7%）。北薩海域における棒受網による漁獲はなかった。
熊本 牛深港	漁獲量は433トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比36%、平年比145%）。	漁獲量は553トンで、前年・平年並み（前年比89%、平年比104%）。	漁獲量は34トンで、前年・平年を下回った（前年比13%、平年比22%）。
長崎	中型まき網の漁獲量は2,813トンで、前年・平年を上回った（前年比151%、平年比556%）。	中型まき網の漁獲量は1,694トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比89%、平年比184%）。	中型まき網の漁獲量は11トンで、前年・平年を下回った（前年比2%、平年比2%）。
佐賀	漁獲量は0.02トンで、前年・平年を下回った（前年比33%、平年比1%）。	漁獲量は0.8トンで、僅かであった前年を上回ったが、平年を下回った（前年比2,400%、平年比41%）。	漁獲はなかった。
福岡	代表港中型まき網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は3トンで、前年を上回り、平年を下回った（前年比369%、平年比43%）。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。
山口	棒受網・すくい網での漁獲はなかった。	棒受網・すくい網での漁獲はなかった。	棒受網・すくい網漁業の漁獲量は小中羽、シラス主体に3トンで、前年・平年を下回った（前年比43%、平年比3%）。

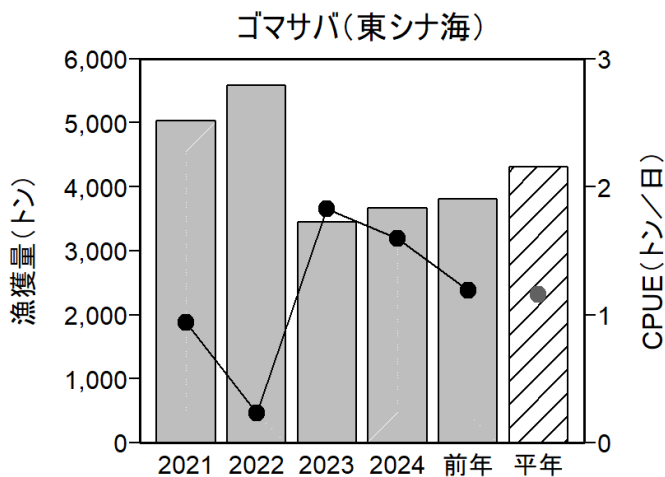
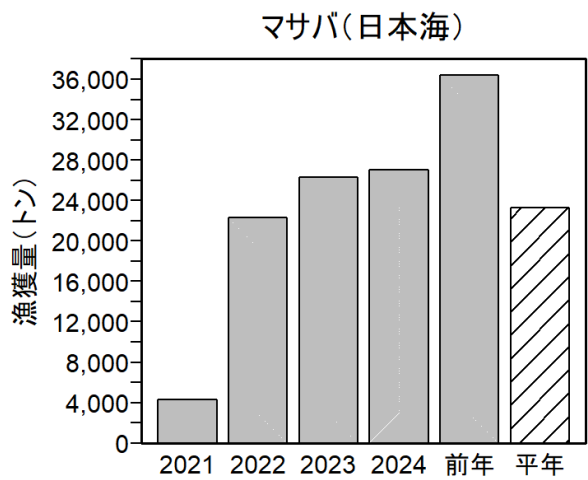
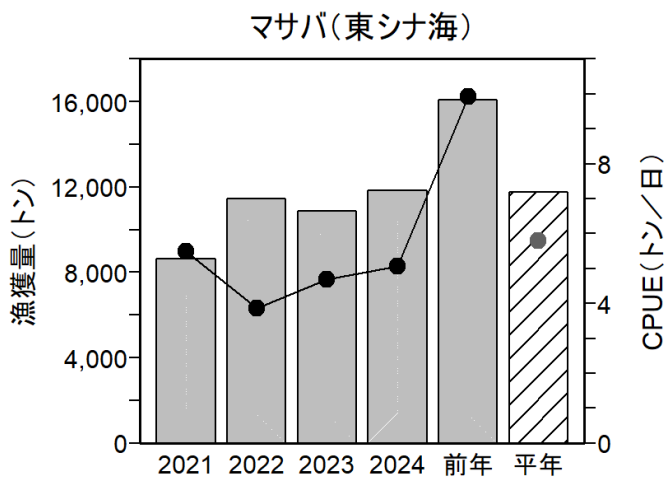
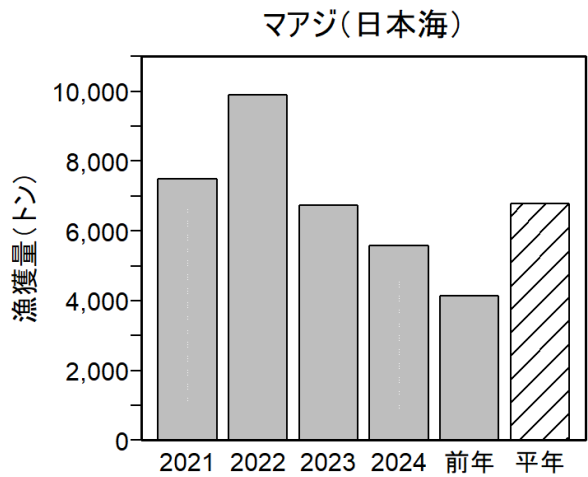
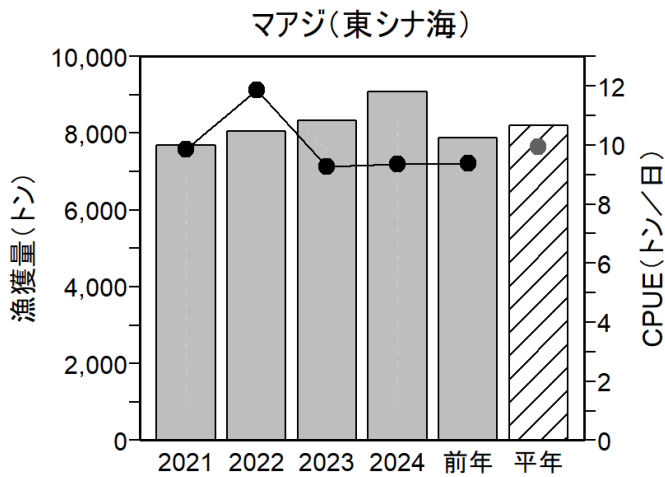
注：「前年」は2024年11月～2025年1月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表2. 日本海における沿岸域の漁況経過（2025年11月～2026年1月）

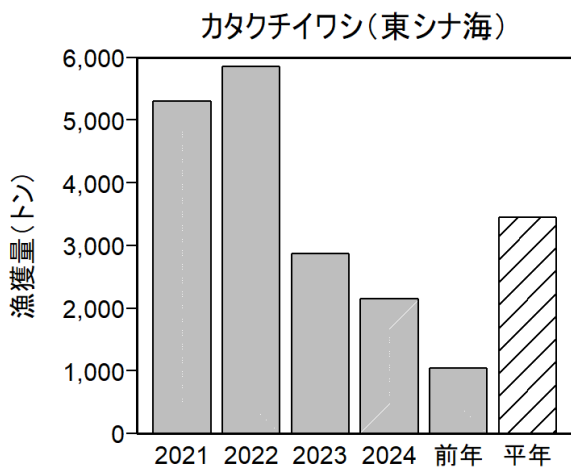
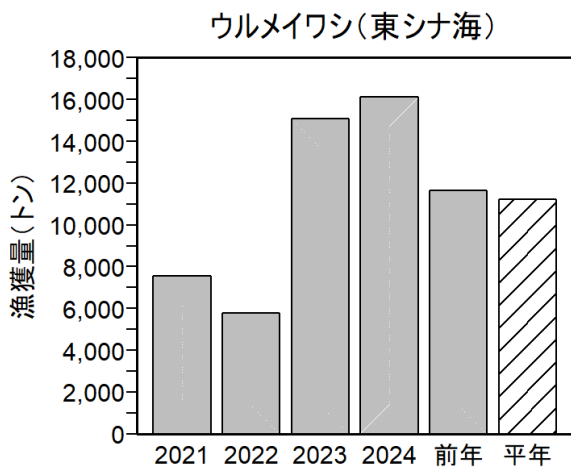
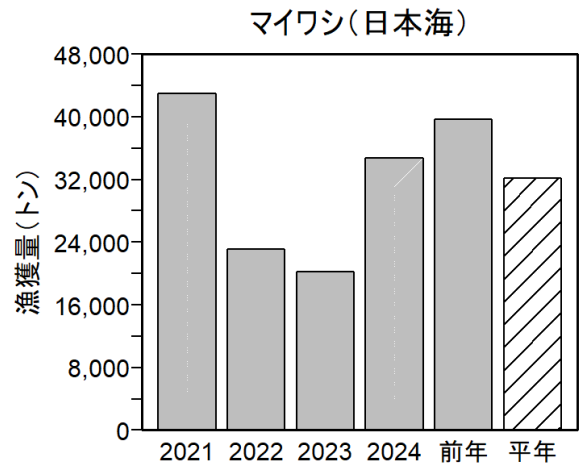
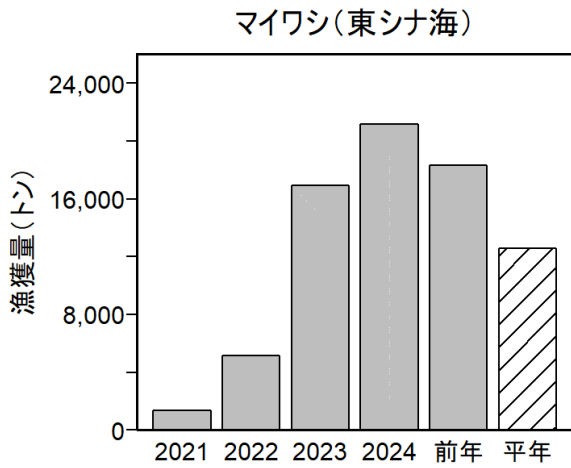
	マアジ	マサバ	マイワシ
島根	漁獲量は159トンで、前年・平年を上回った（前年比865%、平年比149%）。	漁獲量は176トンで、前年・平年を上回った（前年比176%、平年比157%）。	漁獲はなかった。
鳥取	漁獲量は1,932トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比62%、平年比86%）。	漁獲量は10,716トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比83%、平年比130%）。	漁獲量は1,209トンで、前年を下回り、平年を上回った（前年比69%、平年比255%）。
兵庫	漁獲量は6トンで、前年・平年を下回った（前年比34%、平年比29%）。	漁獲量は2トンで、前年・平年を下回った（前年比26%、平年比55%）。	漁獲量は0.7トンで、前年並みで、平年を下回った（前年比112%、平年比69%）。
京都	漁獲量は120トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比145%、平年比115%）。	漁獲量は129トンで、前年・平年を上回った（前年比259%、平年比257%）。	漁獲はなかった。
福井	漁獲量は50トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比205%、平年比97%）。	漁獲量は122トンで、前年・平年を上回った（前年比171%、平年比310%）。	漁獲はなかった。
石川	漁獲量は194トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比135%、平年比83%）。	漁獲量は489トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比72%、平年比88%）。	漁獲量は1.2トンで、前年・平年を下回った（前年比26%、平年比19%）。
富山	漁獲量は279トンで、前年・平年を下回った（前年比31%、平年比62%）。	漁獲量は129トンで、前年・平年を下回った（前年比60%、平年比45%）。	漁獲はなかった。
新潟	漁獲量は92トンで、前年・平年を下回った（前年比54%、平年比63%）。	漁獲量は371トンで、前年を上回り、平年並みであった（前年比157%、平年比105%）。	漁獲はなかった。
山形	漁獲量は19トンで、前年・平年を上回った（前年比129%、平年比127%）。	漁獲量は3.6トンで、前年並みで、平年を上回った（前年比90%、平年比166%）。	漁獲はなかった。
秋田	漁獲量は12トンで、前年・平年を下回った（前年比31%、平年比27%）。	漁獲量は6トンで、前年・平年を下回った（前年比32%、平年比55%）。	漁獲はなかった。
青森	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は67トンで、前年・平年を上回った（前年比144%、平年比127%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は83トンで、前年・平年を下回った（前年比47%、平年比43%）。	陸奥湾を含む日本海における漁獲量は100トンで、前年・平年を下回った（前年比47%、平年比58%）。

注：「前年」は2024年11月～2025年1月、「平年」は過去5年の平均値。
日本海において水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図 (マアジ、さば類)

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網漁業の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、鹿児島県～山口県の主要沿岸漁業漁獲量。ただし、マサバは福岡県、鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量とその他の県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）の合計値。ゴマサバは福岡県と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量の合計値。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。



今後の見通し参考図 (いわし類)

沿岸漁業の漁獲量。東シナ海沿岸漁業の漁獲量は、山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。日本海沿岸漁業の漁獲量は、島根県～青森県の主要漁業（大中型まき網漁業を含む）の漁獲量。4月～9月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	鳥取県水産試験場
秋田県水産振興センター	島根県水産技術センター
山形県水産研究所	山口県水産研究センター
新潟県水産海洋研究所	福岡県水産海洋技術センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	佐賀県玄海水産振興センター
石川県水産総合センター	長崎県総合水産試験場
福井県水産試験場	熊本県水産研究センター
京都府農林水産技術センター 海洋センター	鹿児島県水産技術開発センター
兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
	(取りまとめ機関)
	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所